

# 魏志倭人伝 その2

男子、大小無く(大人も子どもも区別無く)、皆、鯨面(げいめん・顔の入れ墨)文身(ぶんしん・体の入れ墨)す。

男子は大人も子どもも全員が顔や体に入れ墨をしている。

古(いにしえ)より以来、その使、中國に詣る。皆、大夫(たいふ)と自稱す。

古代よりずっとその使者が中國に來ている。その使者は皆自ら大夫と稱している。

夏后少康(夏六代中興の主)の子、會稽(かいけい・浙江紹興)に封じられる。斷髪し文身し以って蛟龍(こうりゅう)の害を避く。今、倭の水人、好んで沈没し魚蛤(ぎょこう)を捕える。文身しまた以て大魚、水禽(すいきん)を厭(はら)う。後やや以て飾と為す。諸國の文身、各々異り。或は左、或は右、或は大、或は小。尊卑に差有り。夏后少康の子どもが會稽に封ぜられた。斷髪し入れ墨して蛟龍(サメ)の害を避けた。今、倭國の水人は好んで沈没して、魚、蛤を捕らえる。体の入れ墨は大魚や水禽を近づけない。後代には裝飾となった。倭の国々の入れ墨は各々異なっている。あるいは左にしあるいは右にし、あるいは大にあるいは小である。尊卑の差がある。

その道里を計るに、當に會稽(かいけい)の東冶(とうや)の東に在る。

その道里を計てみると、邪馬壹國は丁度、會稽の東冶の東に存在することになる。

その風俗、淫ならず。男子は皆露紵(ろかい)す。木綿(もめん)を以て頭に招(か)け、その衣は横幅、ただ結束して相連ね、ほぼ縫うこと無し。婦人は被髪を屈紵(くつかい)す。作衣は單被(たんび)の如くその中央を穿(う)がち、頭を貫きてこれを衣る。

その風俗。婚姻制度が確立している。男子は皆露紵す。木綿を以て頭に招けている。その衣は横幅でただ結束して相連ね、ほぼ縫うことはない。婦人は被髪屈紵し、作る衣は單被のようである。その中央に穴を空け、頭を貫きてこれを衣る。

禾稻・紵麻を種え、蚕桑緝績し、細紵・縑絲を出だす。その地には牛・馬・虎・豹・羊・鵲(かささぎ)はいない。兵には矛、楯、木弓を用いる。木弓は下短く上長し。竹箭(ちくぜん)、或は鐵鏃(てつぞく)、或は骨鏃(こつぞく)なり。

武器には矛・盾・木弓を用いる。木弓は下を短く上を長くし、竹箭はあるいは鉄鏃、あるいは骨鏃である。

有無する所、儋耳(たんじ)、朱崖(しゅがい)と同じである。

産物等有る無いは儋耳(広東儋県)、朱崖(広東瓊山県)と同じである。

倭の地は温暖、冬夏に生菜を食す。

倭の地は温暖で、冬も夏も生野菜を食べる。

皆、徒跣(とせん)。屋室有り。父母、兄弟は臥息(がそく)する處を異にす。朱丹(しゅたん)を以てその身體に塗る。中國の粉を用いるが如き也、食飲は籩豆(へんとう)を用い手食す。

皆裸足である。家屋、部屋が有る。父母、兄弟は臥息する處を異にしている。朱丹を以てその身体に塗る、中國において粉を用いると同じようである。食飲には籩豆(高坏)を用い、手でもって食べる。

その死、棺(かん)はあるが槨(かく)は無し。土を封じ冢(ちょう)を作る。死より始めて喪に停まること十餘日、時に當りて肉を食さず。喪主は哭泣(こくきゅう)す。他人は歌舞(かぶ)に就き、飲酒す。已に葬れば、家を擧げて水中に詣(いた)り、澡浴(そうよく)す。以って練沐(れんもく)の如きなり。

死ぬと棺に収める。しかし槨(そとばこ)はない。土を封じて冢を作る。死んだ時から喪に服するのは十余日である。その時は肉を食わず。喪主は哭泣する。しかし他人は歌い舞い、酒を飲む。埋葬をすまず、家の人皆が川に入って澡浴する。それは練沐(ねりぎぬをきて水浴する)のようである。

その行(倭國の一行)來たり。海を渡り中國に詣(いた)る。恆(つね)に使者の一人は頭を梳(くしけず)らず。蟻蝨(きしつ)を去らず。衣服は垢汚(こうお)。肉を食せず。婦人を近づけず。喪人(そうじん)の如し。これを名づけて持衰(じさい)と為す。

倭國の使者の一行が来る。海を渡って中國に到着する。その時いつも使者の一人は頭をくしけらず、シラミを取らず。衣服は垢で汚れたままにする。肉を食せず。婦人を近づけず。まるで喪に服する人の如くである。これを名づけて持衰(じさい)と為す。

#### 其行來渡海詣中國

主語は「其の行」である。「倭國からの一行」が主語である。述部は「来」、「渡海」である。

「行」とは名詞で、「古代の軍制では25人の兵士」という意味がある。「其の行」とはこの意味である。

倭國から中國に來た使節団は武装していたのである。それを『倭人伝』は、「其の行」と表記したのである。この時代は平和な時代ではない。戦國の時である。倭國からの使節団が自國を離れて魏の首都洛陽に行く時に武装していたのは当然であろう。

若し行(倭國の一行)が吉善(きつぜん)ならば共にその生口(しょうく)、財物を顧す。若し疾病に罹(かか)り、暴害(ぼうがい)に遇うならば、すなわちこれを殺さんと欲す。その持衰が謹(つつし)まずと云えばなり。

もし一行が何事もなく、うまくいけば、持衰となった人の生口、財物共にす(不詳)。若し一行が疾病になったり、暴害に遭ったりすれば、持衰を殺そうとする。それは、「持衰が謹まなかったからこうなった」と言うのである。

#### 若行者吉善、共顧其生口財物

「行」も同じ意味である。通常は、「もし行く者吉善なれば」(魏志倭人伝・石原道博編訳・岩波)と訓まれている。しかし、ここで使われている「者」の用法は、「・・・ば」という仮定条件を表す。

「不殺者為楚國患」(史記・楚世家)は、「コロサザレバ楚國に患を為す」と訓む。これと同じ訓みをする。

「若」は、「もし」である。仮定である。従って、「もし、行が、吉善ならば」と訓まなければならない。

「行」は、倭國から魏の都洛陽に向かう一行である。彼らは武装していた。故に、古代軍制を表す「行」と表現したのである。

「持衰」は、「ジサイ」と読むが、「呉音」である。「ジサイ」を日本語にもどすと、「除災」となる。「災いを除く者」という意味である。

眞珠・青玉を出だす。その山には丹有り。その木には・(だん)・杼(ちよ)・豫樟・(ぼう)・榲・投・檀(きょう)・烏號・楓香が有る。その竹には篠・簞・桃支が有る。薑(きょう)・橘・椒(しょう)・藁荷(じょうか)が有るが滋味と為すを知らず。獼猴(めんこう)・黒雉有り。

眞珠・青玉を産出する。その山には丹あり。その木には・(くす)・杼(とち)・豫樟(くすのき)・・・榲(くぬぎ)・投(すぎ)・かや)・僵(かし)・烏号(やまぐわ)・楓香(おかつら)あり。その竹には篠(しの)・簞(やたけ)・桃支(かすらだけ)がある。薑(しょうが)・橘(たちばな)・椒(さんしょう)・藁荷(みょうが)があるが、滋味とする料理方法を知らない。獼猴(さる)・黒雉がいる。

その俗、事を擧げる行(一行)來たり。云爲(うんい)する所有り。輒(すなわ)ち骨を灼(や)きてト(ぼく)とす。以って吉凶を占う。先ずト(ぼく)するところを告げる。その辭は令龜(れいき)の法の如し。火坼(かたく)を視て兆を占う。

その風俗。仕事を起こす一行が来る。お告げをいう場所がある。そこでは骨を焼いてト(ぼく)を作る。そして吉凶を占っている。先ずト(ぼく)を告げる。その言葉は令龜の法のようなのである。火坼(かたく)を視て兆を占う。

「行」が主語である。「行来」は「行が来る」という主語・動詞である。「事を挙げる」は、辞書では「謀反」の意であるが、ここでは、「謀反」ではなく、「事」つまり、「仕事・勤め」の意であろう。  
仕事を起こす、大事な任務に就く兵士一行がやって来る。その場所は「云為」する所である。  
そこで一行(兵士)は占ってもらふ。骨を焼いて吉凶を占う。そして、占った結果を告げる。  
その言葉は、「令龜の法」のようである。その仕事がつましくかどうか。どうすればつましくのか。仕事を始めるに、先立って占っていたのである。

その會同(かいどう)の坐起(ざき)には父子の別、男女の別無し。

人々が一同に会する時の着座や起立の仕方には、父子の順位、男女の順位などの区別は無い。

人の性(性質)は酒を嗜(たしな)む。

人の性は、酒を嗜む。

大人(だいにん)が敬む所を見れば但(ただ)手を搏(う)ちて以て跪拜(きはい)に當てる。その國の人の壽考(じゅこう)は或は百年、或は八、九十年。

大人(倭國の支配層)が敬むのを見れば、ただ手を搏ち、以て、跪拜の代わりとする。その國の長寿の人は百歳、あるいは八、九十歳である。

その俗、國の大人(だいにん)は皆四五婦。下戸(げこ)の或は二三婦。婦人は淫せず、妬忌(とき)せず。盜竊(とうせつ)せず、諍訟(しやうそう)少なし。

その風俗、倭國の大人(支配層)は皆四、五人の妻を持つ。下戸もある者は二、三人の妻を持つ。婦人は貞淑で、妬忌しない。盜竊もなく、諍訟も少ない。

その法を犯す。輕きはその妻子を没す。重きはその門戸及び宗族を滅す。尊卑各差序有るも相臣服に足る。

もし、法を犯せば、輕きはその妻子を没し、重きはその門戸および一族を滅ぼす。尊卑各々差序があるが、お互い臣服するに足る。

租賦(そふ)を収める。邸閭有り。國國に市有り。有無(うむ)を交易す。使大倭(役職)がこれを監(かん)す。

租賦(年貢)を収める。邸閭がある。國國に市がある。有無を交易し、使大倭がこれをとりしまっている。

「使大倭監之」の訓み

動詞は「監(とりしめる)」である。目的語は、「之(市)」である。主語は「使大倭」である。

「使」は、「……せしむ」という使役の動詞ではない。その場合は「大倭使監之」となる。ゆえに「使大倭」は、一つの単語と読むべきであろう。これは役職名である。

女王國より以北(の国々)に一大率を特置す。諸國を檢察す。諸國これを畏憚(いたん)す。常に伊都國を治す。(伊都)國中において刺史(りし)の如き有り。

女王國より以北の国々(狗邪韓国・対馬国・壱岐国・末廬国・伊都国・奴国・不弥国)に対しては、一大率を特置している。一大率はこれらの諸國を檢察している。諸國はこれを畏れ憚っている。常に伊都國を治めている。だから、伊都國には、魏における刺史(郡國を刺挙しその政績を報告する官)のような役人が國中に居るようである。

王、使(者)を遣わし、京都(洛陽)・帶方郡・諸韓國及郡に詣る。

王は使者を派遣し、魏の京である洛陽、帶方郡、諸韓國の郡を訪問した。

原文は次の文である。

王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王不得差錯

読みが困難であるが、その理由はどこで切るか切り方が難しいからである。切り方によって読みが変わる。通常、次のように切って読まれている。(魏志倭人伝・石原道博編訳・岩波)

王遣使詣京都帶方郡諸韓國  
及郡使倭國皆臨津搜露傳送文書賜遺之物詣女王  
不得差錯

#### 王遣使詣京都帶方郡諸韓國

訓みは「王、使を遣わし京都、帶方郡、韓国に詣る」である。この読みには問題はないが目的地を京都、帶方郡というピンポイント特定していることに対して、韓国は目的地が特定できない  
その点が不満であるが、問題は、このように切って読んだ場合の後続文の読みにある。

#### 及郡使倭國

石原道博氏は、「および郡の倭國に使うや」と訓んでいる。このように、「および郡の倭國に使うや」と読むと、主語は「郡」となる。動詞は、「使」である。動詞「使」は、「つかう」という意である。  
「郡使倭國」は、「帶方郡が倭國を使う」という意味となる。これでは意味不明である。  
では、「使」のもう一つの用法、「使い」という名詞と理解すればどうか。この場合は「郡が倭國に使いを派遣した」という文となる。意味は通るが、この場合は、「郡遣使倭國」と「遣」という動詞が必要となる。

#### 「及」のもう一つの訓み

「及」の用法には二つある。接続詞と動詞である。接続詞「及び」は体言を並べて挙げる用法である。動詞は、「及ぶ」という意味である。「達する」「届く」などの意である。

「及」を動詞として読んでみよう。主語は「郡使」、動詞を「及ぶ」とする。「郡使、倭國に及び」と訓む。問題はないように見えるが、この訓みは文法上成立しない。

中国語の文法は、主語・動詞・目的語の順である。もし、このような訓むなら語順は、「郡使・及・倭國」となる。「及・郡使・倭國」の順では、「及」は、動詞とはならないのである。

「及」を接続詞と考えると、「王は、その使いを洛陽、帶方郡、韓國及び郡に遣した」となる。この訓みが妥当である。

#### 王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡

「及郡使倭國」で切る読みは成立しない。従って、「王遣使詣京都帶方郡諸韓國及郡」と切って読む。

王は、その使いを、洛陽、帶方郡、韓國及び郡に遣した。

(1) 「王」とはどこ王か。

ここには「女王」と書かず、「王」とだけ書いている。従って、「男王」と解釈すべきである。この文の最後には、「詣女王」と書かれている。王と女王は区別されている。

「王」の直前の文は、「伊都國於國中有如刺史」である。「伊都國においては国中に刺史の如き有り」と、伊都國を紹介したあとに、「王」と続く。従って、「王」は「伊都國王」と読むべきである。

伊都國は諸国の中で特別な位置にあった。一つは外交である。中国、韓国との外交は伊都國が担っ

ていた。もう一つは軍事である。ここには、「一大率」が置かれ、諸国を検察していた。

外交と軍事は切り離すことはできない。伊都國王が代々、外交権・軍事権を掌握していたと言えよう。

(2) 京都とは魏の京、洛陽である。伊都國王は、魏の京へ使節を遣わした。

(3) 帯方郡は、204年から313年の109年間、古代中国によって朝鮮半島の中西部に置かれた軍事・政治・経済の地方官庁であった。従って、伊都國王は帯方郡にも使節を遣わした。

#### 後漢書韓伝

韓には三種がある。一馬韓、二辰韓、三弁辰という。「馬韓は西」にあり、56國ある。北は楽浪と南は倭と接している。「辰韓は東」にあり12國ある。北は濊・貊と接している。

弁辰は辰韓の南にあって、これまた12國ある。南は倭と接している。総計78國在る。伯濟はその中の一国である。

#### 魏志韓伝

韓は、南にあって東西は海を以て境界とし南は倭と接す。広さは4000里四方ばかりである。

三種あり、一馬韓、二辰韓、三弁韓といい、辰韓は昔の辰國である。

これらの史書から、「諸韓國」とは「馬韓」「辰韓」「弁韓(辰)」ということになる。伊都國王の使いはこの三国を訪れたのであるが、実際に訪問した場所はどこか。当然、この國の首都(郡)であろう。それが「韓國及郡」である。

「韓國」と「及郡」は切り離して読むべきではない。王の使者は洛陽、帯方郡、そして韓國の郡を訪れたのである。

使倭國は皆、津に臨みて、傳送(でんそう)の文書、(皇帝からの)賜遺(しい)の物を搜露(そうろ)し、女王に詣(いた)る。

#### 使倭國

主語は「使倭國」である。「使倭國」とは「倭國の使者」という意味となる。難しい用語であるが、「倭国から魏への使者」であろうか。魏から帰国した「倭国の使者」は皆津に臨んで皇帝からの贈り物を搜露した。

#### 搜露傳送文書賜遺之物

使者は、「文書」「魏の皇帝から賜わった品々」を卑弥呼の下に届けた。その際、「津」に近づくと、梱包をほどいて、品々を見せながら女王の下に届けたというのである。

差錯(ささく)を得ず。

過不足や交錯が生じることがない。

このような風習は中国には無かった。贈り物を開いて見せて、道中を行くといった危険極まる行為はあり得なかったからである。ところが、倭國では、港に到着すると、荷物の梱包をほどいて、そのまま卑弥呼の下まで運んだ。なるほど、このようにすれば、「差(過不足)」や「錯(交錯)」はないであろうと、感心して陳寿は書いているのである。この「津」とは、女王國への入口となる川尻港である。

下戸(げこ)が大人(だいにん)と道路で相逢えば、逡巡(しゅんじゅん)して草に入る。辭を傳え事を説くには或いは蹲(うずくま)り、或いは跪(ひざまづ)く。兩手を地に據(きよ)す。これが恭敬(きょうけい)を為す。

下戸(一般の人々)が支配層である大人と道路で相逢えば、道を譲り、道ばたに避ける。辭を伝え事を説くには、うずくまったり、または、ひざまづき、兩手を地につける。これが恭敬の表れである。

對應(たいおう)の聲は噫(あい)と云う。(中国語に)比するに然諾(ぜんだく)の如し。

対応の声を噫(あい)という。これは中国語と比較すると「然諾(ぜんだく)」という言葉に相当する。

呉・楚出身の弥生人である姫氏の言語は呉語だった。ところが、「下戸」の言語は、日本語である。その言葉の一つに、「噫(あい)」があった。対応の声を「噫(あい)」と云った、という。

「比するに噫とは然諾の如し」と、『倭人伝』は説明を入れている。「然」とは「しかり、その通り」、「諾」は「答える。はいと答える」の意である。

倭國の下戸が使った「噫(あい)」は、中国語で考えると、「然諾だ」と書いている

「噫(あい)」は、現代日本語で云えば、「はい」と同じである。「はい、わかりました」という意を持つ日本語「噫(あい)」を下戸は使っていた。これは、三世紀の古代日本語に関する貴重な記録である。

その國、もとはまた男子を以て王と為す。住(とど)まること七、八十年。倭國亂れ相攻伐すること年を歴(へ)る。すなわち一女子を共立し王と為す。名は卑彌呼と云う。

その國は、もとは、男子を立てて國王とした。在位が七、八十年続いた。その間に、倭國は乱れ、相攻伐すること何年も続いた。そこで共に一女子を立てて、國王とした。その王の名前は、卑弥呼という。

その國とは、22連邦である。これらの國の王によって、卑弥呼は連邦の王に共立された。以前はこれらの國のいずれかの王が連邦の王となっていた。だが、それでは全ての國の王が納得という訳にいかず、22國が争ったのである。それを、「倭國亂れ相攻伐する」と記した。

これは、倭國の中の個人と個人が戦ったという意味ではない。國と國が戦ったという意味である。

倭國は連邦国家であつたが故に、国家間で争いが生じた。そこで22の連邦の王によって卑弥呼が他國から迎えられたのである。

鬼道(祈祷)を(仕)事とし、能く衆を惑す。

卑弥呼は、祈祷を仕事とし、よく民衆を惑わす。鬼道とは祈祷である。

年已に長大。夫婿(ふせい)無く、男弟有り。佐(たす)けて國を治む。王となりしより以来、見るは少なし。婢千人を以て自ら侍らす。ただ男子一人有り。飲食を給し、居処に出入し辭を傳える。

年は已に長大である。夫婿はなく、男弟がいる。彼は女王を助けて國を治めている。卑弥呼が王となってからは見ることはほとんどない。侍女千人を以て自らに侍す。ただ男子一人あり、飲食を給し、辭を伝え居処に出入す。

宮室、樓觀、城柵を嚴しく設ける。常に人有り。兵を持って守衛す。

宮室・樓觀・城柵を厳かに設けている。常に人がいて武器を持って守衛している。

女王の國の東、海を渡る千餘里。また國有り。皆倭種なり。又侏儒國(しゅじゅこく)有り。その南に在り。人の長(たけ)、三、四尺。

女王國の東、海を渡って千余里にまた國がある。皆倭種である。また侏儒國がその南にあり。その國の人の身長は三、四尺である。

女王を去る四千餘里。又裸國、黑齒國有り。またその東南に在り。船行一年で至るべし。

女王國から四千余里。また裸國・黒齒國がその東南にある。船行一年にして到着する。

倭地を參問するに海中の洲島の上に絶在す。或は絶え或は連なる。周旋は五千餘里なり。

倭の地を參問するに、海中の洲島の上に絶在する。あるいは絶えあるいは連なる。周回を廻ると五千余里ばかりである。

景初二年(238年、皇帝曹叡の元号)六月、倭の女王、大夫難升米(なだのしょうまい)等を遣わし(帯方)郡に詣る。天子に詣り、朝献せんことを求む。

景初二年(西暦238年)六月、倭の女王は大夫難升米(なんしょうまい)等を使者として帯方郡に至った。彼らは魏の天子に詣りて朝献することを求めた。

使者である「大夫難升米」の読みが難しく定まっていない。大夫は倭國の官名である。『倭人伝』は倭國の官を、「伊支馬」「彌馬升」と記載している。「彌馬升」とは「彌馬の将」であろう。これは、謂わば武官の称号である。同じように考えると、「難升米」は「南将・米」という武官名であろう。「米(まい)」が一字名である。

太守劉夏(りゅうか)、吏将を遣わし、(難升米等を)京都(洛陽)に送り詣る。

帯方郡の太守、劉夏は、吏将(部下の役人)を遣わし、使者難升米等一行を魏の都洛陽に送り、到着した。

その年(238年)の十二月、(魏の皇帝は)詔書し、倭の女王に報じて曰く。

その年(238年)の十二月、魏の皇帝は詔書して、倭の女王に次のように伝えた。

親魏倭王卑彌呼に制詔す。帯方太守劉夏は使者を遣わし、汝の大夫難升米(灘の将・まい)、次使の都市牛利(としのぎゅうり)を(洛陽に)送ってきた。

親魏倭王卑弥呼に申し渡す。帯方の太守劉夏が使者を遣わしてきて、汝の使者大夫難升米(南将・まい)と次使、都市牛利を洛陽まで送ってきた。

次使「都市牛利」の読みは難解である。「都市の牛利」となるであろうが、意味は未詳である。「松野連姫氏系図」には、「牛滋」という名の王が記されている。読みは「ギウジ」であろうか。

汝が献する男生口(しょうく)四人、女生口(しょうく)六人、班布(はんぷ)二匹二丈を奉りて到る。

汝が献上した男の生口四人、女の生口六人が班布二匹二丈を奉りやって来た。

「生口」とは何か。ほとんどの人が奴隷と理解する。皇帝へ献上されたというのであるから、「生口」が自由な立場ではなかったと理解できる。だが、奴隷と云うには問題がある。  
「生口」を解くには、皇帝への献上品と関わって考察すべきである。この時の献上品は「班布」である。  
「汝が献上した男生口四人と女生口六人が班布二匹二丈を奉り以て至る」と書いている。  
「生口」が「班布」を奉じている。なぜなら、「班布」は彼らが織ったものだからである。「生口」は彼ら自身が織った班布を自ら皇帝に献上するために洛陽まで行ったのである。  
「生口」は「ショウク」と訓むべきである。倭人が使用した言語は、呉音で読むべきである。「ショウク」とは「小工」である。「大工」の対である。「大工」は「大人の工人」、「小工」は「子どもの工人」の意である。

汝の所在、踰(はるか)に遠きも乃ち使者を遣わし貢献す。これ汝の忠孝なり。我、甚(はなは)だ汝を哀れむ。

汝が住む所は遥かに遠いにもかかわらず、このように使者を遣わして貢献す。これ汝の忠孝である。我ははなはだ汝をいとおしく思う。

今、汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬(きんいんしじゆ)を假(か)す。

今、汝を親魏倭王となし、紫のくみひものついた金印を仮に与える。

装封して、帯方の太守(劉夏)に付し、假授(かじゆ)す。

金印紫綬を装封して帯方の太守(劉夏)にことづけて、仮授する。

汝、その種人(しゅじん)を綏撫(すいぶ)し、勉めて孝順を爲せ。

汝、その人民を安んじいたわり、勉めて皇帝への孝順をなせ。

汝の來使、難升米(灘の将・まい)、牛利(ぎゅうり)は遠きを涉(わた)り、道路勤勞す。今、難升米を以て率善中郎將と爲し、牛利を率善校尉と爲す。銀印青綬を假(か)し、引見(いんけん)勞賜(ろうし)し、遣わし還(かえ)す。

汝の來使、難升米と牛利は遠きを越えて、道路を苦勞してきた。今、難升米を以て率善中郎將となす。牛利を率善校尉となす。銀印青綬を仮に与え、引見しねぎらつて、遣わし還す。

今、絳地(こうち)交龍錦五匹・絳地繡粟罽(すうぞくけい)十張・菁絳(せんこう)五十匹・紺青(こんじょう)五十匹を以て、汝が献貢に直に答える。

今、絳地交龍(赤地にミズチと龍の模様を織る)錦五匹、絳地銘粟罽(赤地に細かいケバの付いた毛織物)十張、菁絳(茜で染めた赤色の布)、紺青(色の布)五十匹を与え、汝の貢献にただちに応えよう。

又、特に汝に紺地句文錦三匹・細班華罽(さいはんかけい)五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠鉛丹各五十斤を賜い、皆装封して難升米、牛利に付す。

また、特に汝に紺地句文錦三匹・細班華罽五張・白絹五十匹・金八両・五尺刀二口・銅鏡百枚・真珠鉛丹を各々五十斤を賜う。全て装封して難升米・牛利に託した。

(彼らが國に)還り到らば録受(ろくじゅ)し、悉(ことごと)く、以て汝の國中の人に示し、國家(魏皇帝)が汝を哀れむと使知(しらしむ)べし。故に鄭重(ていちょう)に汝に好物を賜うなり。

彼らが倭國に歸つて來たとき、目録と照合して受取り、全てのものを汝の國中の人に示し、國家(魏皇帝)が汝を哀れむと知らしめよ。故に鄭重に汝にとびきり素晴らしい物を賜うなり。

正始元年(240年、第三代皇帝曹芳の元号)、太守弓遵(きゅうじゆん)は建中校尉、梯儁(ていしゆん)等を遣わし、(彼らは)詔書(皇帝の命令書)と印綬(先の金印紫綬)を奉じて、倭國に詣る。

正始元年(西暦240年)、帶方郡の長官、太守弓遵は建中校尉梯儁らを使者として倭國に派遣しました。梯儁らは皇帝の詔書と金印紫綬を奉じて倭國に來た。

倭王・并に拝假(はいか)し、詔を齋(せい)し、金帛(きんぱく)・錦罽(きんけい)・刀・鏡・采物を賜う。

倭王・(かつ)に会い、魏皇帝の詔を与え、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。

#### 拝假倭王并

倭王の次の文字は、「并」である。意味は、「併(あわせる)」「並(ならぶ)」である。

この文において、「并」が「併せる」「並びに」という意味で使われているとすれば、この文字は意味をなさず浮いてしまう。しかし、「并」には、別の用法がある。それは、人名である。「カツ」と読む。この文では、「倭王并」と読むべきある。

帶方郡太守弓遵の使者建中校尉、梯儁は倭國にやって來た。そして王に会った。その王は「カツ」と名乗ったのである。「并」は「勝」、或いは「葛」であろう。六世紀の倭國の王「磐井」の子どもは「葛子」といった。この名前も「カツシ」と読むべきであろう。また、神武記には、「兄猾・弟猾」が登場する。この兄弟の名前も、「猾(カツ)」である。

#### 齋詔賜金帛錦罽刀鏡采物

魏皇帝の詔を齋し、金帛・錦罽・刀・鏡・采物を賜う。「齋」は「セイ・サイ」で、「財宝を持ってくる」の意である。

倭王、因りて使(梯儻)に上表(皇帝への返書をしたため)、詔恩(皇帝の詔と恩)に答謝す。

倭王并(かつ)はそこで使者に皇帝へのお礼の書を託し、皇帝の詔と恩に答え感謝した。

その四年(243年)、倭王、また使(者)大夫(たいふ)伊聲耆、掖邪狗等八人を遣わし、生口(しょうく)、倭錦(わきん)、絳青縑(こうせいけん)、縣衣(めんい)、帛布(はくふ)、丹、木・(もくふ)、短弓、矢を上献す。掖邪狗等は率善中郎將の印綬を壹拝す。

正始四年(西暦243年)、倭王は再び大夫伊聲耆、掖邪狗等八人を派遣して、生口(職人)、倭錦、絳青縑、縣衣、帛布、丹、木・、短弓、矢を献上した。掖邪狗らは率善中郎將の印綬を頂いた。

その六年(245年)、詔して倭の難升米(灘の将・米)に黄幢(こうどう)を賜い、(帶方)郡に付して假授す。

その六年(西暦245年)、皇帝の命により倭の難升米に黄幢(魏の黄色い旗さし)を与え、帶方郡長官に託して假授した。

その八年(247年)、太守王頡(おうき)、官(帶方郡の役所)に到る。

その八年(西暦247年)、太守王頡王祈が帶方郡の官庁に赴任してきた。

倭の女王卑彌呼、狗奴國の男王卑彌弓呼と素(もと)より和せず。倭の載斯(さいし)烏越等を遣わし、(帶方)郡に詣り、相攻撃する状を説く。

倭國の女王卑彌呼は、狗奴國の男王卑彌弓呼と元々仲が良くなかった。そこで女王は、倭國の祀司、烏越等を帶方郡に派遣して、両国の争いの様子を説明した。

「載斯」の読みは「さいし」である。これは中国側の表記であるが、日本語に戻すと、「祀司」であろう。烏越は「宇悦」であろう。倭國には生死に関わる祀りごとを司る専門職がいた。死者を葬るとき、祀司による葬儀が執り行われたのは当然であろう。

(太守王頡は)塞曹掾史(さいそうえんし・郡の属官名)張政(ちやうせい)等を遣わし、因りて詔書・黄幢(こうどう)を齎(せい)し、難升米(灘の将・米)に拜假す。檄(回状)を為して之を告諭(こくゆ)す。

それを聞いて太守は属官の塞曹掾史、張政等を派遣して、皇帝の命令と黄幢を持参して難升米に会い与えた。彼は回状を作ってこのことを國の人々に告示した。

卑彌呼以て死す。大いに冢(ちやう)を作る。徑百餘歩。徇葬(じゆんそう)する者は奴婢百餘人。

卑彌呼が以て(すでに)死去した。大きな塚が作られた。その塚の直径は約百歩であった。百人以上の奴婢が殉葬された。

更に男王を立てるも國中服せず。更(こもごも)相誅殺(ちゆうさつ)し、當時千餘人を殺す。また卑彌呼の宗女(しゅうじょ)壹与(いよ)、年十三を立て王と為す。國中遂に定まる。

倭國は以前と同じように男王を立てたが國中が治まらず、お互いに千人以上が死んだ。そこでまた、再び歳十三の卑彌呼の宗女(一族の娘)壹与を立てて王とした。そこでやっと国中の争いが治まった。

壹与は中国側の表記で、記紀では「伊豫」である。國生みの「伊豫二名島」の中に「壹与」の名前を見ることができる。この島の名前の特徴は「二名」にある。文字通り「二つの名前」という意である。一つの名前は「伊豫(いよ)」、もう一つの名前は「豊(とよ)」である。

故に、二名島と呼ばれたのである。中国側の表記も「壹与(いよ)」、「台与(とよ)」と二通りある。伊豫と呼ばれ、また、豊と呼ばれた女王の島は彦島老町である。伊豫二名島の西側の人間の鼻に見える島が「橘(立ち鼻)の島」である。この島が『記紀』神話國生みの舞台である。

『魏志倭人伝』は、「壱与は卑弥呼の宗女である」という。宗女とは同族の娘という意である。卑弥呼の一族の娘、壱与を女王として迎え邪馬壱國は治まった。

壱与は彦島老町の出身である。すると、卑弥呼も壱与同様、彦島老町の出身ということになる。

天照大神の系譜の二人の女性が九州西部の古代国家の女王として迎えられていたという訳である。

政等、檄(回状)を以て壱与を告諭(こくゆ)す。壱与、倭の大夫率善中郎将、掖邪狗等二十人を遣し、政等を送り還す。因りて臺(洛陽中央官庁)に詣り、男女生口(しょうく)三十人を献上し、白珠五千孔、青大勾珠二枚、異文雜錦二十匹を貢す。

張政等は回状でもって壱与が王位についたことを国中に告示した。壱与は倭の大夫率善中郎将掖邪狗等二十人を遣わし、張政等を帯方郡に送り帰した。そうして、彼らは臺(洛陽中央官庁)に到着して、男女の生口三十人を献上し、白珠五千孔・青大勾珠(穴の開いたヒスイの大玉)二枚・異文雜錦二十匹を貢上した。

2024・11・10更新